

2020 年 1 月 27 日

2019 年度聖路加国際大学大学院看護学研究科
課題研究

助産師だからこそできる性教育とは
Sex Education as Taught by Midwives:
The Nature and Practice

18MW005

國光なな子

要旨

研究目的：本研究の目的は、思春期の生徒を対象とした、助産師だからこそできる性教育とはどのようなものであるか、特徴や意義を含め、助産師の視点から明らかにすることである。

研究方法：研究デザインは質的記述的研究である。研究対象者は便宜的抽出法にて選定した。研究対象者は中学校あるいは高等学校において性教育の経験がある助産師とした。研究対象者に対し、半構成的インタビューを行い、得られたデータの逐語録を作成し、それを熟読、コード化し、サブカテゴリー・カテゴリーを抽出した。抽出したサブカテゴリー名、カテゴリー名や分類が妥当かどうか、該当領域の研究者と議論を重ねた。本研究は聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認（承認番号：19-A042）を得てから行った。

結果：中高生を対象とした性教育実施経験のある助産師 8 名に半構成的インタビューを実施し、データの分析を行った結果、8 つのカテゴリーと 16 のサブカテゴリーが抽出された。助産師は、臨床において女性に寄り添うことを重視しているため、性教育の場においても【生徒に寄り添いながら話す】ことが特徴として語られた。性教育は生徒の多様な背景によっては、その内容や言葉によってつらい思いをすることや傷つく可能性のある教育である。助産師はそのような生徒を減らし、少しでも自信につながる性教育となるよう、【生徒の多様な背景に配慮する】【自己肯定感につながる内容を伝える】ようにしていた。また、助産師は様々な場面で生や性に真剣に向き合い、対象の思いや痛みを肌で感じている職業である。そのため【臨床の実際をリアルに伝える】ことや【性をポジティブなものとして伝える】ことができる。さらに、専門職として日々、勉強や経験を積み上げている助産師は生徒に【適切な知識や情報を伝える】ことが可能である。そして、助産師は臨床の現場で集団を対象に健康教育を実施する機会が多く、人前で話す経験を積み上げ、日々教育のスキルを磨いている職業でもあり、【生徒に合わせて様々な授業の工夫をする】ことが明らかになった。また、外部講師として学校で性教育を実施することから教員が言いにくい性に関する内容も含めて助産師は【性について堂々と伝え(る)】ていた。

結論：助産師だからこそできる性教育として 8 つのカテゴリーと 16 のサブカテゴリーが抽出された。今後は、生徒や学校教員等、他の立場から見た助産師が実施する性教育についても研究を進めることで、助産師だからこそできる性教育について新たな知見が得られると考える。